

# 大学教育の総合評価

## その2 ICU 在学生による学生生活の評価

岩 瀬 純 一  
中 山 和 彦  
原 一 雄

### I 研究の目的と問題

本研究は、大学教育の総合評価(1)の一具体例として、本学在学生による学生生活の評価をとりあげたものである。

1967年2月に本学において生じた学園紛争の直接の原因は、入学試験受験料の問題及び能研テストの利用という二点に求めることができるが、同時に大学当局と学生との間のコミュニケーションの困難さも、事態を悪化させた重要な要因としてあげることができよう。実際、紛争に関連した同大学の構成員はすべて、大学という組織についての自らの考えを他者に伝え、また他者の考えを理解することの困難さを痛感していたにちがいない。

人間は社会生活を営む過程において、さまざまな集団の規範を、社会化、役割などの過程を通して自らに内在化させていく。また各人には独自のひろがりをもつ心的世界がある。政治・社会への関心、友人・仲間との交流、家族への愛、等その領域の分化及びそれぞれへの関心の度合いは、それぞれ十人十色であろう。具体的状況において示される人間行動の背後に、こうした統一性をもつ心の全体的なダイナミズム、それは態度とも価値志向ともいいかえることができるもの、を仮定することは困難ではない。従って人間の行動を理解する際に、それが個人的レベルであれ集団的なものであれ、その背後にある態度、価値志向を知ることができるならば、それは

相互理解への大きな助けとなるばかりでなく、将来の行動の予測をもある程度可能にし、また対人関係をより建設的な方向へと促進することができるであろう。大学における紛争の一つの要因と数えられたところの、構成員各自が相互に理解することの困難さも、上記の観点から各々の背後にある大学に対する態度をとらえることにより、ある程度克服できるのではないだろうか。

今日における大学の機能の主なるものとして、研究と教育とをあげることには問題はあるまい。教育機関としての大学はなによりもまず自らのよってたつ教育理念をもち、その理念にのっとった教育を行うべく努めているはずである。従って理念達成にふさわしい教育環境を備えるべく努力しているはずである。この場合の環境とは、単に物理的側面のみを意味するのではなく、そこに漂う雰囲気のような心理的側面までも含めたものである。この教育環境を学生の側からみると、それは自らがそこで学び生活をする場としての、生活環境であり大学生活そのものである。

大学が自らの教育理念を高く標榜するとき、自らなした教育がいかなる効果をあげているかを測定し、今後の教育活動にフィード・バックする必要がある。その測定は、極めて狭義の教育、つまり教科活動から、いま述べた教育環境のような広義の教育にまで及ぶべきである。

学生の学生生活に対する評価を調べることは、大学が自らの教育の成果を検討する際に、学生が自らの考えを大学教育に反映させるために、また個人的レベルにおける分析によって適応・不適応の問題の研究に、有力な資料を提供することと予想される。この学生による学生生活の評価は、学生生活を構成する要素のいかなるものを自らの学生生活にとって大切であるとみなしているか、及び現状に対していかなる程度満足と感じているか、の二面をとらえ、更にその間のギャップを研究することによってより明確にとらえることができるであろう。

以上述べてきたように、本研究の目的は、学生による学生生活の評価を考察することであり、具体的には、学生をいくつかの下位集団に分け、集

団の間で評価の相違が生じる学生生活構成要素が何であり、学生は現状にどの程度の充足感あるいは不満を抱いているかを調査することである。

## II 方 法

被調査群と調査時期：1967年10月現在，国際基督教大学教養学部 に在籍する学生のうち外国人学生を除いた全員に回答を求め，197名から回答を得た。その内訳は第1表のとおりである。

Table 1. Classifications and numbers of subjects responded.

Category	Group	Number	Total	Category	Group	Number	Total	
Sex	Male	84	197	Major	Non	36	197	
	Female	113			N. S.	17		
Year:	Fr.	43	197		Humanities	28		
	So.	64			S. S.	67		
	Jr.	48			L.	39		
	Sr.	42			Ed.	10		
Age	18-20	106	192	Future	Job	66	193	
	21-22	65			Gr. School	29		
	23-	21			Undecided	98		
Club	Non	98	196	Christianity	Interested	32	192	
	Cultural	43			Not	160		
		Sport		55	Residence	Home	78	182
Sr. future	Decided	18	40			Dormitory	82	
	Undecided	22				Lodging	22	

注) Total が197になっていない Category があるのは無回答があったためである。

調査用紙：大学における学生生活を構成していると考えられる領域を教科活動（領域2），課外活動（領域3），行事（領域4），制度特色（領域5），設備・施設（領域6），環境（領域7），日常生活（領域8），に大別し，これら各領域について物理的・経済的側面，運用面，学生の態度面を考慮しつつ具体的な項目（総数110）を作成した。更に各領域を抽象的に表現する

Table 2. Chi-squares obtained from the analysis of variance in each area for "Importance"

Area	Sex	Year	Age	Club	Major	Future	Sr. Future	Chris- tianity	Residence
1	.03	2.22	2.71	1.29	1.21	.15	**15.55	**15.61	1.58
2	.00	**5.49	*3.69	*3.11	1.03	.21	**16.74	* 4.39	1.78
3	.59	**4.00	*4.42	.58	*2.42	2.77	* 6.45	** 7.69	.79
4	.01	**9.83	**7.46	2.01	*2.46	2.38	* 4.61	3.21	2.41
5	.02	**4.76	**7.33	*3.92	1.57	1.54	* 5.38	* 4.91	2.96
6	1.42	2.40	1.65	2.95	1.69	1.04	* 4.26	.01	2.04
7	1.16	2.61	**4.93	**6.47	1.29	1.05	* 4.16	1.09	.58
8	3.33	2.20	.92	1.76	.21	1.11	.37	.40	**10.65

\* Level of significance at .05

\*\* Level of significance at .01

Table 3. Chi-squares obtained from the analysis of variance in each area for "Satisfaction"

Area	ex	Year	Age	Club	Major	Future	Sr. Future	Chris- tianity	Residence
1	0.5	*3.79	**5.71	1.07	**4.90	2.33	1.21	3.65	1.15
2	2.92	**9.14	**6.63	1.69	**3.63	1.14	1.87	3.55	2.15
3	.94	1.25	.88	.49	.87	.55	.83	1.42	.87
4	.44	3.64	2.03	1.59	.42	.10	*5.59	3.12	.65
5	*5.79	**5.77	**7.38	2.31	**3.25	.37	.71	2.55	.72
6	**7.07	1.94	1.29	.20	1.40	1.37	.17	*4.38	* 3.34
7	2.86	.13	.59	1.00	.79	.01	2.43	**10.00	* 3.49
8	1.29	.13	.13	.73	1.22	.63	.04	.14	1.3

\* Level of significance at .05

\*\* Level of significance at .01

と思われる項目11を加え、質問紙の冒頭（領域1）とした。（付録参照）

この121項目につき、被調査者自身が大学生活を送るにあたって、いかなる程度大切であると認めているか、また現在はいかなる程度満足な状態にあるか、の2側面から5件法によって反応を求めた。整理の段階において前者の側面を「大切さ」指数、後者の側面を「満足度」指数、その差を

Table 4. Chi-squares obtained from the analysis of variance in each area for "Unfulfillment"

Area	Sex	Year	Age	Club	Major	Future	Sr. Future	Christianity	Residence
1	*4.88	**8.27	1.19	.57	2.18	2.86	.21	.72	.01
2	2.62	1.38	1.62	.09	1.08	.91	1.48	.00	1.77
3	1.73	1.35	*3.07	.13	*2.53	1.28	2.73	3.29	1.83
4	.15	**6.50	*4.49	.61	**3.23	1.48	.60	**8.35	1.90
5	1.88	.21	.19	2.10	.53	.70	1.34	.27	* 4.11
6	**7.57	.60	.89	1.50	.84	.11	1.15	2.01	** 5.40
7	.07	1.38	2.25	1.41	1.23	.53	.20	1.41	.05
8	*4.00	.98	.18	.24	.75	.53	.09	.03	** 8.73

\* Level of significance at .05

\*\* Level of significance at .01

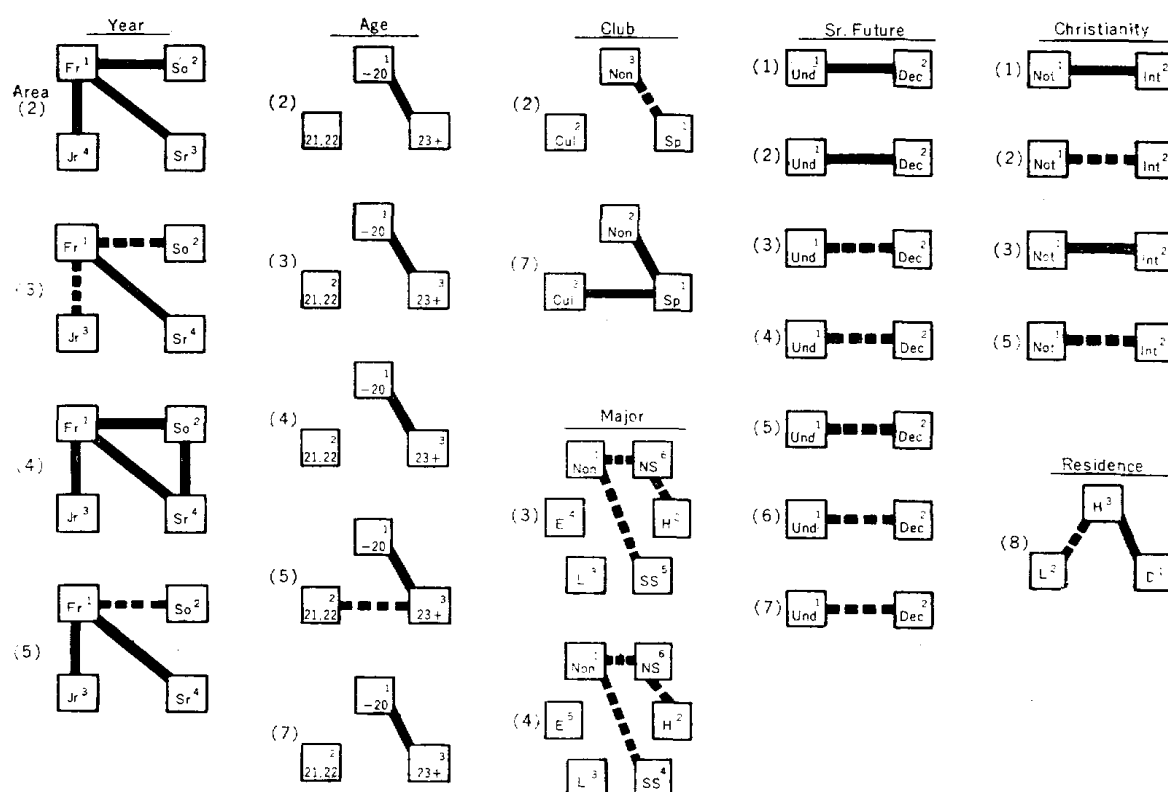


Fig. 1. Significant differences among student subgroups on evaluation of "importance" for each area.

「不満足度」指数とした。ただし計算の便宜上この値を正数化する為に+5を加えた数値が計算に用いられた。

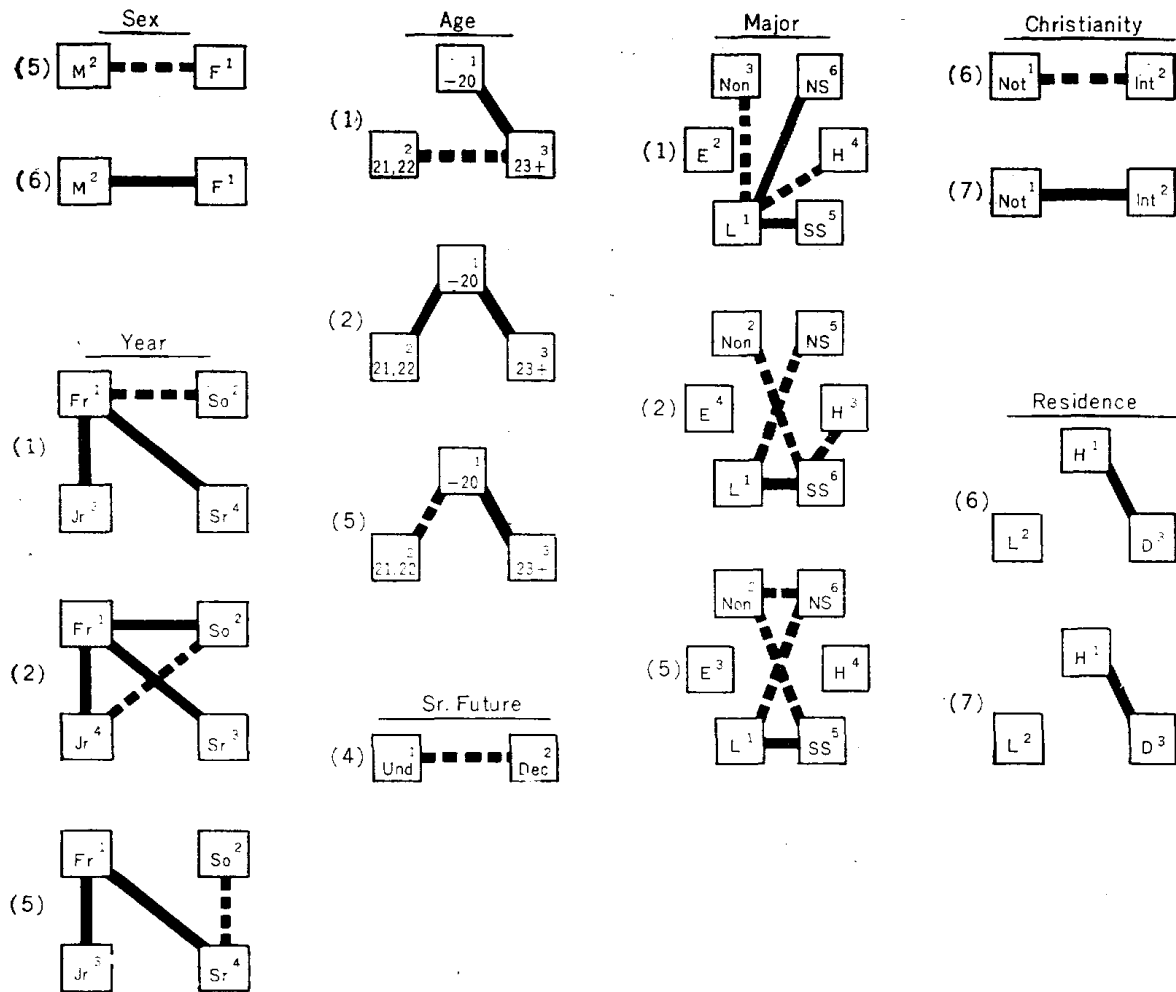


Fig 2. Significant differences among student subgroups on evaluation of "Satisfaction" for each area.

### III 結 果

回収された資料は、まず本学の電子計算機 IBM 1130 によって記録され、各個人毎に 8 領域の小計が求められた後、それらの得点の下位集団間の分布が分散分析法によって検定された。その結果は第 2, 3, 4 表に示された通りである。この内、有意な差のみられた領域については、更に t 検定によって、下位集団間の平均値の差を検定した。その結果が図 1, 2, 3 であり、下位集団名の右肩の数字は評価得点の順位を、点線は 5%，実線は 1% の水準において有意な差のみられたことを示している。



101	Freshman English					
102	Natural Science の General Education					
103	Social Science の General Education					
104	Humanities の General Education					
105	Physical Education.....理論					
106	Physical Education.....実技					
107	area courses					
108	基礎科目					
109	選択科目					
110	価値観研究					
111	Oral Communication					
112	Senior Thesis					
113	第二外国語					
114	教職課程					
115	専門職への準備					
116	日米用語の重視					
117	3 学期制					
118	B-average 制					
119	クラスの出欠に関して基本的ルールがないこと					
120	教養学部一学部制					
121	コース新設についての学生側の意見の反映					
122	入試方法					
123	non-Japanese の受け入れ体制					
124	講義内容					
125	教授陣容					
126	教授の教授方法					
127	教授の研究心					
128	教授の社会的活動					
129	Evaluation の仕方					
130	教授の人格・人柄					
<hr/>						
201	大学の広報活動					
202	同窓会活動					
203	宗教活動（礼拝）					



204	コンボケーション					
205	カウンセリング、学生相談					
206	就職指導					
207	advisor 制度					
208	経済援助制度					
209	オリエンテーション					
210	学生の自活組織・活動					
211	新聞会					
212	スポーツ・クラブ					
213	研究サークル					
214	美術系クラブ					
215	音楽系クラブ					
216	演劇系クラブ					
217	思想・科学研究系クラブ					
218	宗教関係奉仕グループ					
219	SFC 制度					
220	入学式					
221	オリエンテーション・キャンプ					
222	IBS 制度					
<hr/>						
301	寮 祭					
302	宗教強調週間					
303	Campus clean-up day					
304	修養会					
305	Summer Camp (野尻, 夏期奉仕活動)					
306	友達プログラム					
307	ICU 祭					
308	X'mas 行事					
309	スキー・キャンプ					
310	マラソン大会					
311	卒業式					
312	Ball					
<hr/>						
401	ICU の理念					
402	教養学部 4 年制					
403	学生の構成内容 (性別, 宗教, 国籍)					

404	1年生のセクション制度						
405	全寮制						
406	寮の advisor 制度						
407	寮の house mother 制度						
408	ICU Family						
409	学生の社会的関心（社会と時代の要求と ICU 生の姿勢）						
410	大学の経営方針						
411	教授会の運営，あり方						
<hr/>							
501	食 堂						
502	クリニック（健康管理のセンター）						
503	語学教育設備						
504	視聴覚教育センター						
505	実験設備						
506	グラウンド						
507	体育機具・施設						
508	チャペル						
509	図書館の設備						
510	図書館の利用方法						
511	社交場（皆が集まれる所）						
512	売店，床屋，靴屋，etc.						
513	寮の設備・運用						
<hr/>							
601	学問的分野における他大学との交流						
602	スポーツ競技などによる他大学との交流						
603	文化面における他大学との交流						
604	諸外国（外国の大学）との交流						
605	地理的条件						
606	娯楽施設						
<hr/>							
701	勉学の間としての現在生活している場						
702	健康の面から現在生活している場						
703	大学における人間的接触，交際：友人						
704	〃 教師						
705	〃 親・兄弟						
706	〃 先輩						

707	//	後輩					
708	//	異性					
709	大学生活における余暇の利用						
710	授業料						
711	寮費下宿代						
712	食費						
713	書籍費						
714	遊興交際費						
715	アルバイト						
716	スカラーシップ						

#### IV 考 察

1年生は、教科活動（領域2）、課外活動（領域3）、行事（領域4）、制度・特色（領域5）の4領域において、他の学年と有意な差をもってそれらの大切さを認めている。これは、高校時代には大学入試の受験勉強におわれていたが、その最終目的である大学に入学できた1年生が、新たな母校である大学のこれらの諸領域に、大きな期待をいただいている結果と解釈できないであろうか。2年生以後は、学年が進むにつれて大切さを認めなくなっていく傾向にあるが、各学年間には有意な差が認められなかった。

1年生はICU全般（領域1）を、比較的満足さをもってうけとめている。また教科活動についても、他学年に比べてより満足している状態にある。1年生は、大学における教科活動に対する彼らの期待が、さほど裏切られてはいないようである。1年生よりはだいぶ満足度はおちているが、それでも3,4年生とは有意な差をもって、2年生も満足している状態にある。3年と4年の間には有意な差は認められない。この1年生と2年生との差は、大学入学後の興奮もおさまり大学生活に慣れはじめた2年生が、大学における教科活動を自分なりに求めはじめていることを示しているのかも知れない。

低学年（1年生，2年生）と高学年（3年生，4年生）との間に教科活

動に対する満足度について大きな差を認めることができる。この差は、3年、4年になると現実の教科活動の質の程度にますます不満をもっていくようになることを示しているのか、あるいは現在の教科プログラムと異なる内容、方向を要求するようになって生じるものかのいずれかはこの質問紙からは何もいえない。ただ、4年制教養学部をたてまえとしてプログラムが組まれている現在のICUの教科活動が、3年生、4年生の要求するところとかなりずれているという疑いはさけられないであろう。なお20歳を境としてそれ以下の学生が21歳以上の学生よりも教科活動について高い満足状態にある。これは先にのべた2年生を境としてみることのできる有意な差に対応する。教科活動に対する満足度と年齢的成熟との間には関連がみいだしにくい。

住居別比較において目立つ点は、まず日常生活の領域（人間的接触，経済生活）（領域8）において、これに大切さを認めることに関し顕著な差のみられることがあげられる。これは、通学生には安全な家があり、慣れ親しんでいる地域環境があるので、改めてこうした領域の大切さを感じるような状態になったことがないが、一人で家をはなれて生活するようになった寮生は、一旦は不安な状態におちこみ、寮における人間的な交流等を経験してどうにか安定をとりもどしているので、これらの点の大切さを体にかけており、その反映がこうした結果となっていると理解できないだろうか。なお寮生と下宿生との間には差が認められず、下宿生と通学生との間にやはり差が認められている。

設備、施設の領域（領域6）については、通学生と寮生とを比較する時、寮生がかなり不満をもっていることがわかる。大学で過ごす時間が生活の一部分にすぎない通学生にとっては、さほどの不備は感じられなくとも、生活が大学に密着している寮生にとって、現状は不満だらけなのであろう。こうして寮生は設備・施設についてかなりの不満足感をいただくに至る。また大学がうたう制度・特色（領域5）もその中で生活している寮生からみれば、彼らの望むほどには実施されておらず、従って不満足感をこれまた

いただいているように見受けられる。

上記の点とは逆に、環境の領域（地理的条件、他文化圏との交流）（領域7）については、通学生が最も不満が高く、寮生が低い。大学内でその生活のほとんどを過ごす寮生は、しらずしらずのうちに大学の環境にとじこもり、安住し、外へ積極的にでていこうとしなくなる。一方通学している学生にとって、ICU はまず通学するのにあまり便利でもなく、また常にさまざまな刺激をうけている家庭の生活に比べ、大学はやや世間一般から隔離しているように感じられるのであろう。

いままでの比較において、下宿生は寮生と通学生の中間に位置していたが、日常生活領域（領域8）に関して、彼ら下宿生は最も充足されていない状況にある。家族とも離れ、また寮生のようにたとえ家をはなれていても仲間で集団生活を送ることもなく、親和度の低い地域社会環境の中に一人で生活することを余儀なくされる下宿生は、自ら望む状態とはかなりかけはなれた対人関係と経済状態にあり、従って最も充たされていないのであろう。

その他、顕著なものとして、4年生の進路決定者と未定者との比較があげられる。日常生活領域を除くすべての領域について、未定者のほうが大切さをより多く認めている点、留年生の心理状態を知る手がかりになりそうにも思われる。

この調査にあたって作成された8つの領域には、さまざまな次元の項目が含まれていると推定されるが、現段階では各領域の内的整合性について不明である。それ故に、更に項目ごとの調査・分析をなすことによってより明確な結果を導くことができると期待される。

## 文 献

### 1. 原一雄・渡辺幸一

“大学教育の総合評価 その1：大学における学校評価と国際基督教大学のための一試案” 教育研究 14号 1969

## Comprehensive Evaluation in Higher Education

### II. Students' Self-Evaluation of Their Student Life at ICU.

Jun'ichi Iwase, Kazuhiko Nakayama, Kazuo Hara

This is the first report from a series of studies on the evaluation of students' life at ICU as an application for the comprehensive school assessment at college level, whose principle and methodology was described in the preceding article. (Hara & Watanabe)

#### Problem :

Since the campus atmosphere determines to a certain extent the basic ground for the success or failure of any educational program, the present investigation tries to focus its attention on the students' general attitudes towards their student lives i. e. how much they recognize the importance of, and how much they have been satisfied with, the various characteristics and activities of the university at present.

#### Method :

In October 1967, a questionnaire, "A survey of attitudes toward student life", was distributed to all Japanese undergraduate students in the Liberal Arts College at ICU, and 197 responses were collected. The questionnaire consisted of 121 items in 8 areas, which were considered as major components of student life. The 8 areas of student life were as follows :

1. General impression of ICU.
2. Academic programs.
3. Extracurricular activities.
4. University events.

5. Unique characteristics of ICU.
6. Educational and living facilities.
7. Contacts with the off-campus world.
8. Daily living circumstances.

The responses to these items were obtained from two aspects : —how important they thought these were, and how much they were satisfied. The gap between these two were considered to reflect the degree of unfulfilment or frustration.

Individual sub-total scores for those 8 areas were used as basic data for statistical analysis. For group comparisons, the subjects were also subgrouped into various categories according to their sex, years at college, age, clubs to which they belonged, decisions for career, major fields of study, interest in Christianity, and types of residence.

#### Results :

The distributions of individual scores for the areas were examined by analysis of variance, whose chi-squares are shown in Tables 1, 2 and 3. For those categories that showed statistical significance t-tests were then employed to check those group differences, and the significant mean differences are shown in Fig. 1, 2 and 3.

#### Conclusion :

As a whole, the subjects rated their student life as important. Consequently, they indicated some discontent with their present condition. Since general problem areas in their student's lives, at least from their viewpoint, have been exposed very clearly, more thorough scrutiny of each item is strongly recommended. Also, by comparison with other groups, such as faculty and alumni, it should be possible to detect the problematic foci and to find causes for their frustrations as well as to suggest some possible remedial programs for their unhappy student life.